

Title	慶應義塾図書館蔵『(古今和歌集序注)』(零本)解題と翻刻
Sub Title	A reprint and a study of Kokinwakashu-jochu housed in Keio University library
Author	川上, 新一郎(Kawakami, Shinichiro)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2015
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.50 (2015. ) ,p.3- 13
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	山本英史前文庫長・川上新一郎教授退職記念
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20150000-0003">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20150000-0003</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 慶應義塾図書館蔵『古今和歌集序注』（零本） 解題と翻刻

川上 新一郎

本書には簡単であるが、かつて稿者が執筆した紹介文がある。<sup>1)</sup>

公費での購入直後に広報誌に掲載した紹介のため、表現が誇大なのが気になるが、内容についての考えは現在も変わっていない。そこで、主要部分を左に掲げることとする。一部不要な注記を省略した。

今回新たに図書館が購入した「古今和歌集序注（仮称）」一軸は、書写者こそ明らかではないが、南北朝期を下らぬ古写本で、本塾所蔵の古今集注釈書の中で、疑いもなく最古の写本である。

本書は消息の反古裏を使用し、片仮名交じりで注を記しており、六紙と半葉三紙、計七紙半残存し、仮名序注全体の約三分の一を断続的に残している。近時その順序に従って継がれ、卷子本になっているが、装丁は不体裁であり、今後しかるべき措置を講ずる必要がある。掲載の図版でも判るようになり、各紙の中央に折目、両端に綴じ穴があり、現在の形態になる以前は冊子本であった可能性がある。

本書は既にその推定書写年代の古さだけでも十分な価値を有するが、古今集の中でも最重要視されてきた仮名序の注釈であり、かつ内容的には、藤原為家の「古今序抄」（京都大学付属図書館中院文庫はか所蔵）を基に解り易く和らげ、

増補を加えており、中世の古注釈の中では比較的正統な位置を占めるものと考えられる。

本書と同種の注釈としては、京都府立総合資料館蔵「古今聞書」（近世初）写三冊、歌注も含む、但し一部欠）が存在しており、それには応永二十五年（一四一八）の本奥書が記されているが、本書の書写年代はその本奥書の年紀をも遡ることは確実であり、この注釈の淵源の古さを立証し、年代的な橋頭堡を築くことができる。

また、本書を京都府立総合資料館本と比較すると、後者は誤字や脱文が散見される他、声点を欠いており、零本ながら本書が現在の最善本であることが認められる。

なお、紙背は本書の書写年代をさほど遡らぬ同時期の女房消息として注目される。また、本書は箱書<sup>32</sup>によれば、京都大学の碩学故吉澤義則博士旧蔵本の由で、学界未紹介資料である。

以上で概ね意は尽くしていると思われるが、もう一度まとめると次のようになる。

慶應義塾図書館蔵本（一三三X—一七）

〔古今和歌集序注〕（零本）

〔南北朝〕写

一軸

袋綴を改装する卷子本。比較的近時の浅緑色地唐花文様空坪表紙（三二・二×二一・八糎）。表紙上部に水浸みがあり、本文料紙に及んでいる。外題なし。見返、金銀切箔散し布目紙。料紙、奉書紙（女房消息紙背利用）。大きさ、袋綴の状態で約三二・二×二五・五糎。墨付、見開き六紙（六丁分）に続いて半葉のもの三紙、つまり計九紙、七丁半分を一部つなぎの補紙を加えて貼り継いでいる。台紙なし。この内、第六、七、八紙は連続する。字面高さ、約三〇・五糎。每半葉十三〜十六行不等。内題、奥書等零本のため欠。片仮名交り文。

ここで紹介文を補足すると、「藤原為家の「古今序抄」（京都大学付属図書館中院文庫ほか所蔵）を基に解り易く和らげ、増補を加えて」いるとしたのは、片桐洋一氏が京都府立総合資料館蔵「古今聞書」について述べられた見解に従ったものである<sup>33</sup>。但し、これのみでは本書と為家の「古今序抄」とが極めて近い関係にあると誤解されかねないが、片桐氏が「古今序抄」

を基にしているとされる古今集注釈書<sup>(1)</sup>はそれぞれ様々な様相を呈しており、似たり寄ったりとは言い切れない。本書も「古今序抄」の影響を受けていることは明らかであるが、単なる増補と言える程そっくりではない。その辺は「古今序抄」の翻刻と比較して頂きたい。<sup>(5)</sup>

また、本書を京都府立総合資料館蔵「古今聞書」(貴四五二)と同一注釈と認定した点は慶應義塾大学附属研究所斯道文庫編『古今集注釈書伝本書目』(平19刊)においても踏襲したが、<sup>(2)</sup>「京都府立総合資料館本とは異本」としたのは大事の取り過ぎで、単に同一注釈としてよかったと考える。中世の古今集注釈においては本文の揺れ幅が大きく、相当の異同があつても同一注釈として括らざるを得ない場合が多いことを考えれば、本書と京都府立総合資料館本を異本とまで称する必要はなからう。後掲の校異を見ればわかるように一字一句の校異が可能であり、かなり近い関係にあることが伺われる。さればといって本書が京都府立総合資料館本の祖本かと言えそうではない。第1紙の「此哥ノコトナルヘシ」以下何カ所か京都府立総合資料館本が欠く点(最大は第2紙の「此哥ノオコリヲ云ヘリ、下ニマタ、人ノ世ト成テ、トテ卅一字ノ哥ヲオナシ哥ノオコリライヘルハ、

人ノ世ト成テ)の脱落)は後者の脱落の可能性も考えられるが、第8紙で「マクラ詞」の注で本書が「又臣等ヲマクラト云事分明也」とする箇所が後者で「又延喜式ニ臣等とよめり春ノ花匂すくなくといへるは卑下の詞也」とするのは「春ノ花ノニホヒスクナクシテ」の注をも含み、明らかに別文であり、本書が後者の祖本であることを否定する。

〔注〕

(1) 「秘蔵」(30)『古今和歌集序注』(〔南北朝〕写本)〔三田評論〕平2・3)。

(2) 箱に「歌謡古文書／女房奉書／吉澤義則旧蔵」と墨書貼紙。

(3) 片桐洋一氏『中世古今集注釈書解題』一(昭46刊、116頁以下)参照。

(4) 為家抄、大江広貞注、古今集素伝懐中抄、及び本注などが挙げられている。

(5) 片桐氏注(2)著書所収。

(6) 『古今集注釈書伝本書目』では函架番号を「特八三一―五一」としたが、京都府立総合資料館のホームページでは

本文のようになってゐる。

- (7) 『古今集注釈書伝本書目』における通称書名は「常縁古今和歌集聞書」。なお、この注釈には他に東山御文庫本(存卷一九、二〇)がある。

〔翻刻〕

凡例

- 一、以下は慶應義塾図書館蔵『古今和歌集序注』零本(函架番号一三二X―一七)の翻刻である。

一、漢字、仮名ともに原則として通行の字体に改めたが、一部旧字体、異体字を残した場合もある。

一、片仮名はテニヲハに小字のものがあるが、特に区別しなかつた。なお、校異に用いた京都府立総合資料館本にも小字片仮名がままあるが、特に区別していない。

一、翻読の便宜のため、私に読点を付した。

一、各紙末に便宜のため、通し番号を付したほか、見開きになる第1紙から第6紙までは半葉末を「」で示した。

一、虫損・破損などによる判読不能箇所や難読箇所は□で示した。なお、相当字数が失われていると考えられる場合は、(欠)

とした。

一、推読した場合は(ハ)を付した。

一、書き誤りが疑われる箇所、意味不明の箇所には(ママ)を付した。

一、声点は末尾に一括して示した。

(前欠)

阿奈陀磨波夜弥多尔輔施禾施邏須阿泥素企廻多伽避顧祢  
此哥ノコトナルヘシ

アラカネノツチニシテハスサノヲノ尊ヨリソオコリケル

是ハ地ニシテ哥ヲ読コトハスサノヲノ尊ノ時ハシマルトイフ

事也、スサノヲノ尊ハ御心ノアシキニヨリテ天照大神ニ出雲

国ニオヒクタサレ給シニ大ニナケク所アリ、其故ヲトヒ給

フニ、我此国ノ国津神ナリ、父ヲハ足<sub>足</sub>ツチトイヒ母ヲハ

手<sub>手</sub>ナツチトイフ、我ハ八人ヲ子ヲモチタリ、ヤマタノヲロチ

ノタメニ年々ニノマル、今ハコノ女クシイナタヒメハカリナ

リ、又ノマレムトス、ト申ケレハ、我ニ其女ヲエサセ給テム

ヤトノ給ニ、シカナリ、ト申、イナタ姫ヲハ」ユツノツマク

シニトリナシテ御頭ニサシ給テハノ酒舟<sub>サカ</sub>ニ酒ヲ入レテオロチ

ニアタへ給へリ、エイフシタルヲハキ給へルトツカノケムヲ  
モテキリ給テ、スカノチニ宮作シ給テ、哥説シテ曰

ヤクモタツイツモヤエカキツマコメニ

ヤエカキツクルソノヤエカキヲ

ヤ雲立ト云ハオロチノオカシラハアリテヤツノヲ八ツノ谷有  
故ニヤトコロタテル雲也、龍ハ尾ヨリ風ヲイタシ、クヒノ下  
ヨリ雲ヲイタスカ故ナリ、此ノ龍ハ八ノクヒヨリ八ノ雲立故  
ニ八雲立出雲トヨメリ、下照姫ノ譚(ハ)アツメ八天シテ読ルユヘニサキ  
トセリ、スサノヲノ尊ノ哥ハ地ニシテヨメルユヘニ後トス」

1

ノソキテソサノヲノ尊ノ事ヲイヘリ、チハヤフル神世トハ天  
神七代ヲイヒ、人ノ世ト成テトハソサノヲノ尊ニアラスヤ、  
答云、真名仮名両序ヲヨクく心エワクヘシ、其故ハ神ノ世  
七代和哥未作云々、哥ノスカタ未オコラサラムニハ文字サタ  
マラストモシルヘカラス、故ニ仮名序ニ、チハヤフル神世ト  
イヘルハ、地神ノ時ナリ、世ニツタハレルコト下照姫素盞鳴  
尊トイヘル、皆地神ノ時ナレハ哥ノ文字モサタマラストイハ  
ム事ハ、世ニツタハリテ後ノ事ナルヘシ、凡譚ノオコリニツ

キテ今天地ノ人ノ次第ヲ書ノフルニ、カミニステニ、アラカ  
ネノツチニシテハソサノヲノ尊ヨリソオコリケル、トテ此哥  
ノオコリヲ云へリ、」下ニマタ、人ノ世ト成テ、トテ卅一字  
ノ哥ヲオナシ哥ノオコリヲイヘルハ、人ノ世ト成テ卅一字  
ノ哥ヲヨム其ノ源ヲアラハサムカタメナリ、シカアラスハオナ  
シ哥ヲニタヒイフヘカラス、故ニ人ノ世ト成テソサノヲノ尊  
ノ三十一字ヲヨムトイヘル義方ミカナヒ侍ルヘキナリ  
カクテソ花ヲメテ鳥ヲウラヤミ霞ヲアハレヒ露ヲカナシフ心詞  
オホクサマくニ成ニタリ

是ハ事物ニ染テ譚ノ心詞オホク成ニタル事ヲ云也

トヲキ所モイテタツ足モトヨリハシマリテ年月ヲワタリ高山モ  
フモトノチリヒチヨリナリテ天雲タナヒクマテオヒノホレルコ  
トクニ此哥モカクノコトクナルヘ□

居易座右銘云

\*千里始足下高山起微塵云々」2

\*頭書「□云」

タニカケテキオヒマイリテ宮ツクリホトナクシケリトナム、  
此御門八位ニヲハシマスコト八十七年ナリ、スヘテ御年八百

廿年ナムヲハシマシケル、御門ノ第一ノ御イノリハ民ノウレ  
エヲト、メサセ給ヘキナリ、トソフミニモ申テ侍ル、其後位  
ニツカセ給タリシ時新羅ノ王仁トイフ人御門ヲソヘ奉リシ哥  
ナリ

ナニハツノ哥サキニカケリ

ナニハツノタカツノ宮ニ御座アリケリ、今ハ平野ノ大明神ト  
現シ給ヘリ、イフカリヲホヘテトハイフセク思テトイフ詞ナ  
リ、カツラキノ大君トハ天武天皇ノ御子也、後ニハ橘ノ姓ヲ  
給ハル、万葉ニ見タリ、左大臣橘ノ諸ヘノ朝臣コレナリ、  
大君ヲミチノ国ヘツカハサレタリシ時二国ノマウケヲロンカ  
ナリトテイカレル気色アラハナリケレハ、ウネメナリケル女  
カハラケトリテ大君ノヒサヲタ、キテ

アサカヤマカケサヘミユル山ノ井ノ

アサクハ人ヲ思フモノカハ

トヨミケレハ大君ノ心トケニケリ、此ニ哥ハ哥ノ父母ノヤウ  
ニテソ手ナラフ人ノハシメニモシケル、トイフハ人ノ心ヲヤ  
ハラケシハシメナル間、モトモコレヲ哥ノオコリト云ナリ

詩正義云

詩者論功

頌徳之語

訶止癖防邪之說

譎又ヲナシカルヘシ、ナニハツノ哥ハコウヲロムシトクラセ  
ウスルミナモトナリ、アサカ山ノ哥ハ」3

タキノイト、ソナリヌヘラナル

草ノ露水ノアハヲ見テ我身ヲオトロキ

ツユヲナトアタナルモノト思ケム

我身モ草ニヲカヌハカリソ

水ノアハノキエテウキヨトシリナカラ

ナカレテナヲモタノマル、カナ

アルハキノフハサカヘオコリテ時ヲウシナヒヨニワヒ

ヨノ中ハナニカツネナルアスカ、ハ

キノフノフチソケフハセニナル

教長卿ノ注云、時ヲウシナヒトハワロキ身ノサカヘテヨキラ

ケカシウシナフナリ

シタシカリシモウトクナリ

昔ミシ人ヲソイマハヨソニミル

アサクラ山ノ雲井ハルカニ

アルハマツヤマノナミヲカケ

キミヲ、キテアタシコ、ロヲワカモタハ

スエノマツ山ナミモコエナム」

野中ノミツヲクミ

イニシヘノ野中ノシ水ヌルケレト

モトノコ、ロヲシル人ソクム

秋ハキノシタハラナカメ

アキハキノシタハイロツクイマヨリヤ

ヒトリアル人ノキネカテニスル

暁ノシキノ羽カキヲカソヘ

アカツキノシキノハネカキモ、ハカキ

キミカコヌヨハ我ソカスカク

アルハクレタケノウキフシヲ人ニイヒ

ヨニフレハコトノハシケキクレ竹ノ

ウキフシコトニウクヒスソナク

吉野河ヲヒキテ世ノ中ヲウラミキツルニ

ナカレテハイモセノ山ノナカニオツル

ヨシノ、カハノヨシヤヨノ中」4

人丸ナラノ御門ニアヒタテマツルヨシハ大和物語并拾遺集ニ

見エタレト、万葉集ニハ藤原宮御時石見国ニテ身マカレリト

見エタリ、又官位事モ正三位ト見タル事モ侍レトモ公卿補任等ニ所見ナシ、カヤウノ不審タツネサタムヘシトイヘトモ、

哥ノ本意ニアラサレハシルサス

是ハ君モ人モ身ヲアハセタリトイフナルヘシ

此ハ君臣合躰ノ義ナリ、臣ヲハ人トヨムナリ、

秋ノユフヘ立田河ニナカル、ヲモミチヲハ御門ノ御目ニ錦ト見給春ノ朝吉野山ノサクラハ人丸カ心ニハ雲カノミナムオホエケル

問、カミニイフカコトク哥ハコトハリヲサキトシマコトヲア

ラハスヘシ、シカアルヨリ紅葉ヲ錦ト見給桜ヲ雲カト思ケル

ハ、皆イツハリニテコソ侍レ、カ、ル君ト臣トヲサシテ哥

ノ聖ト云ルハ狂言綺語ヲ哥ノ本意ト云ニハアラスヤ

答、此疑イマタ六義ノ心ヲワキマヘサルニヤ、六ノ中ニタト

ヘ哥ノ心ハ花ヲ雲ニニ七紅葉ヲ錦トイヘル事ハシメテ可驚

ニアラス、タトヘテイヒハシメタルハ哥ノ躰ヲ作イタセルナ

リ、サレハカヤウノタトヘ哥マテモ心ニ思事ヲアリノマ、ニ

イヒアラハシテ、イツハリカサレル所ナキカ故、哥ノ聖ト云

ルナルヘシ

又山辺ノ赤人トイフ人アリケリ、哥ニアヤシクタヘナリケリ人

丸ハ赤人カカミニタ、ムコトカタク赤人ハ人丸カシモニタ、ムコトカタクナムアリケルコノ人ノヲ、キテマタスクレタル人モクレタケノヨ、ニキコエカタイトノヨリノニタヘスソアリケルコレヨリサキノ哥ヲアツメテナム万葉集トナツケラレタリケルコ、ニ古ノ事ヲモ哥ノ心オモシレル人ワツカニヒトリフタリナリキ」5

皆以艶為基不知歌之趣」者也云々、タ、艶色ヲサキトシタルハ哥ノサマヲ不知ト云也

カ、ルニ今スヘラキノ雨ノシタシロシメスコトヨツノ時コ、ノカヘリニナムナリヌルアマネキオホムウツクシミノナミヤシマノ外マテナカレヒロキ御メクミノカケツクハ山ノフモトヨリモシケクオハシマシテヨロツノマツリコトヲ聞食スイトマモロノ事ヲステ給ハヌアマリニ古ノ事ヲモワスレシフリニシ事ヲモオコシタマフトテイマモミソナハシ後ノ世ニモ伝ハレトテ

問云、マツリコトヲキコシメスイトマモロノ事ヲステ給ヌアマリトイヘリ、哥ノ道マメナルコトニハアラネト、徒事マテモステ給ネハカクアツメラルトイフニコソ、哥ヲ教誡ノハシトノミイフ事は等ニハタカヒ侍ニヤ、答云、哥ヲ教誡

ノハシトイフハ、哥スナハチ政トイハムトニハアラス、教誡ハモト政ノ」ミナモトナレハ哥又オナシカルヘシ、サレハ哥ヲヤカテ政トイフヘキニアラス、サレハ政ヲキコシメスイトマト云ナリ、又モロノコトヲステ給ハヌアマリニトイフハ、上ノ下ヲオサメ給事其ミチニアラス、ヨロツノ事ニツケテ世ヲメクミ人ヲヲシヘ給ハムトテ、絶タル路ヲツキスタレタル道ヲオコシ給ナリ、モロノコトヲステ給ハネハトテ、国ノタメ其安ナカラム事ヲハ後ノ世ニモツタハレトテエラヒオカルヘキニアラス、上ニ既ニ、アマネキ御ウツクシミ

広キ御メクミ、ナトイヘリ、其心ヲ顯スナルヘシ

延喜五年四月十八日ニ大納記キノトモノリ御書所ノアツカリキノツラユキサキノカヒノサウクワムオフシカウチノミツネ右衛門府生ミフノタ、ミネラニオホセテ万葉ニイラヌ古哥ミツカラノヲモタテマツラシメタマヒテナムソレカナカニ梅ヲカサスヨリハシメテホト、キスヲキ、紅葉ヲオリ雪ヲミルニイタルマテ又ツルカメニツケテキミヲ思ヒ人ヲモイハヒ秋ハキ夏草」6ヲミテツマヲコヒアフサカ山ニイタリテタムケライノリアルハ春夏秋冬ニモイラヌクサノノ哥ヲナムエラハセ給ケルスヘテ干哥ハタマキナツケテ古今和哥集トイフ

古今ノ名ハ詩正義曰、コキンハトイテ詰訓者釈コキンハトイテ古今之異辭コキンハトイテ辨二物形貌コキンハトイテ云々、此文ニツキテ今集ニナツケタルニヤ

カク此タヒアツメラレテ山下水ノタヘスハマノマサコノカスオホクツモリヌレハ今ハアスカ河ノ世ニナルウラミモキコエス

是ハ哥ノ道ヲオコシテウルハシキスカタラエラヒオカレヌレハ、今ハ色ニツキ花ニナルコトモナクシテ人ノ心モタ、シク世ノ中ノカハルウラミモアルマシトイフナリ

サ、レイシノイハホトナルヨロコビノミソアルヘキ」7

是ハアタナルコトハカナキナケモノナクシテ人（ノ）タノシヒ世オサマリヌレハ政ヲヨロコビテ君ライハヒタテマツル事ノミアルヘシト云也、故真名序云

測変為瀬之声、寂々閉口、破長為巖頌、洋々満耳云々

其マクラ詞春ノ花ノニホヒスクナクシテムナシキ名ノミ秋ノ夜ノナカキヲカコテレハ

マクラトハ臣等トイフ也、真名序云

臣等詞少春花之艶名窃秋夜之長云々

臣等ハ我等トイフヤウナル心也、或物ニル云ト書タリ、又臣等ヲマクラト云事分明也、詞ツタナクテ哥読ト云名ヲノミトレリトイフナルヘシ、長トイフハスケタル義也」8

アフキテイマヲコヒサラメカモ

オホソラノ月ヲミルカコトクニトイフハ、文選序云

キコウカセキコウフ姫公之籍孔父之書与ニカ、リ日月ト俱懸鬼神争トアララフカキ二輿ニ云々

サレハ此集ノ勝タル事ヲアラハサムトテ、オホソラノ月ヲ見

カコトクトイフナルヘシ、シムケニ深溪フガキタニ二ノソマサレハ地ノ厚事ヲシ

ラサルカコトク、今ノ集ノ心ヲエサラムニハ哥ノフカキ道ヲシルヘカラス、イニシヘヲアフキ今ヲ恋サラメヤトイフハ、

世ノコトハリヲワキマヘ哥ノサマヲエタル人ハ此ノ〔集〕〔欠〕

テ上古ノ聖代ヲシリ〔以下欠〕」9

#### 〔声点〕

声点は圈点で、濁音は二点注記で付されているが、かなり大まかで、平声・上声が区別できるに過ぎない。以下、声点が付されている箇所を抄出し、秋永一枝氏『古今和歌集声点本の研究 資料篇』（昭47刊）の表記法にならって以下のように掲出する。

先に本文を掲出し（訓点等は省略）、次に「平」（平声）、「上」（上声）、「○」（声点ナシ）で示す。濁音はゴシック体とする。

1 紙、阿奈陀磨波夜弥多尔輔柁禾柁邏須阿泥素企適多伽邏顧柁  
平平平上上上平平上上上平平上上上平平上上上平平上上上  
カネノ上上上上上○、イツモヤエカキツマコメニヤエカキツク  
ルソノヤエカキヲ上上上上上上上上上上上上上上上上上上上上  
上上上上上上上

2 紙、チリヒチヨリ○○上上○○  
3 紙、イフカリ○○○○

〔校異〕

凡例

一、漢字仮名の区別、漢字の宛方、仮名遣、振仮名・振漢字の有無、訓点・送仮名の違いは省略する。

一、「の」の有無についても原則として省略する。

一、京都府立総合資料館本には声点はないので、声点は校異の対象としない。

1 紙、輔柁禾柁邏須―輔柁禾柁邏須、此哥ノコトナルヘシーナシ、地ニシテ―地にて、哥ヲ読コトハ―ナシ、スサノヲノ尊ノ―

素戔嗚尊ソサノヲノミコト、我ハ此国ノ―此国ノ、八人ヲ―八人ノ、モチタリ―

もちたりしを、エサセ給テムヤーえさせてんや、シカナリト申―  
しかなりと申しければ、酒舟サカネ―船、谷―谷二、有故ニ―あるか  
ゆへに、クヒノ下ヨリ―頭のしたより、此ノ龍ハ―此頭ハ、譚  
ハ―哥ハ、天シテ―天して、

2 紙、答云―答、故ニ―故、チハヤフル神世―ちはやふる神、

カミニステニ―上二既、此哥ノオコリヲ云ヘリ下ニマタ人ノ世  
ト成テトテ卅一字ノ哥ヲオナシ哥ノオコリヲイヘルハ人ノ世ト  
成テ―ナシ、シカアラスハ―しからは、イフヘカラス―いふ  
へきにあらず、故二人ノ世ト―故人ノ世ト、アハレヒ―あはれ  
み、成ニタリ―なりたり、染テ―したかひて、ノホレル―のほ

れるか、ナルヘ□―なるへし、居易座右銘云―居易座右銘曰

3 紙、カケテ―かたけて、八十七年ナリ―八十七年、申テ侍ル―  
申侍るめる、其後―御、王仁―王仁キヨイサイウメイニ、御門ヲソヘ奉リシ哥ナリ―  
ナシ、ナニハツノ哥サキニカケリ―なにはつにさくやこの花冬

こもりいまは春へとさくやこのはな、ナニハツノタカツノ宮ニ  
御座アリケリ―ナシ、ヲホヘテ―思ひて、ヨミケレハ―よみ侍

ければ、之語―云々、譚―歌者、之説―云々、譚又―詩哥

4 紙、草ノ露―草の露をみ、野中ノミツヲ―野中のしみつを、

モトノコ、ロラーもとの心は

5紙、官位事モ一官位ノ事、所見一見所、サタムヘシー沙汰すへし、ナカル、ラーなかる、シカアルヨリ一しかあるに、云ニハアラスヤ一いふにあらすや如何、六ノ中ニ一六義ノ中ニ、タトヘ哥ノ心ハ一たとへ哥といふは、可驚ニアラス一おとろくへからす、タトヘ哥マテモ一たとへ哥にも、ナキカ故一なきかゆへに、云ルナルヘシーいへり

6紙、趣者也云一趣者也、サキトシタルハ一さきとしたる、今スヘラキノ雨ノシターすへらきのあめのしたを、ウツクシミノ一いつくしみの、イマモミソナハシーいまもみそなはしめ、トイヘリーといへる、カクアツメラルーかくあつめらる、哥ヲ教誡ノハシトノミー哥教誡のはしとのみ、ミナモトナレハ一みなもととなり、一ニアラス一ニ一ニあらす、国ノタメ一国のため、其安ナカラム事ヲハ一其要なからむ事は、四月十八日ニ一四月十八日、大納記一大内記、サウクワン一志、タテマツラシメ一たてまつられしめ、又ツルカメニ一鶴亀に

7紙、今集ニ一今の集、アスカ河ノ世一あすか川の瀬、今ハ色ニツキー人は色ニつき、アルマシト一あるましきと

8紙、人（ノ）一人の、測変為瀬之声寂々閉口破長一測変為瀬

之声寂々閉口破長、マクラトハ一まくらといふは、或物一或文、尔云ト書タリー尔云かけり、又臣等ヲマクラト云事分明也一又延喜式二臣等とよめり春ノ花匂すくなくといへるは卑下の詞也、詞ツタナクテ一詞つたなくして、名ヲノミー名のみ、長一長シ9紙、姫公之籍孔父之書一姫公之籍孔之書、見カコトクト一みるかことくと、イニシヘヲアフキテ一いにしへをあふき、此ノ〔集〕（欠）テ上古ノ聖代ヲシリ（以下欠）一此集ノ心をみて上古ノ聖代をもしり延喜ノ御時をもあふくへしと云也

〔付記〕本書の調査と翻刻に便宜を与えられた慶義塾大学三田メディアアセンターに謝意を表するものであります。